参加者の声

日本青年

- 三日間で韓国青年と交流する機会がたくさんあり、とても充実した会話をすることができた。
- ディスカッションで、両国の青年が議題について深く語り合うことができ、貴重な時間だった。
- 普段の生活では韓国人と接する機会がなかったので、韓国青年から色々と話を聞けて良かった。
- 日韓文化交流の夕べでは、韓国青年が熱い声援を送ってくれたことが印象に残った。
- 日韓文化体験企画では韓国の文化を体験でき良かった。韓国の昔の遊びがとても楽しかった。
- 日本人、韓国人ともに参加者とのつながりを持て、うれしかった。

韓国青年

- ディスカション、運動会、チーム別活動等、様々なプログラムを通じて日本の青年たちと親しくなり、深い話もすることができて良かった。
- お互いを知り、理解することができるとてもよい時間だった。二泊三日が短く感じた。
- 若い青年たちが一緒に両国の未来について対話し、分かち合い、共に描くことのできるよい時間となった。
- 日本語専攻にも関わらず今まで日本人に会う機会があまりなかった。つどいを通して日本の友人と話をし、考えが新しく変わった。
- 合宿を通じてより深みのある対話をすることができた。親密な交流ができ、とても良かった。
- この事業の中で一番記憶に残るプログラムだった。三日間一緒に寝て、食べて、考えを共有して親しくなった。これきっかけにさらに成長できたと思う。

京都府プログラム（7月31日～8月3日）

7月31日から8月3日まで、京都府にて地方プログラムを実施した。

一行は、京都府到着後、ホテルルビノ京都堀川にて京都府府民生活部長を表敬訪問した。部長からは京都府の歴史や文化についてのお話があった。

18時半から歓迎会が開かれ、地元青年や関係者等、多くの方の歓迎を受けた。

翌8月1日、一行は西陣織会館を訪問し、京都の伝統工芸の一つである西陣織の織体験を行った。

その後、大徳寺聚光院を訪問し、日本の仏教や建物についての理解を深めた。夕方は、嵐山に移動し、浴衣を着て嵐山を視察した。韓国青年からは、「日本の古くからの文化財と文化を体験することができて良かった」「歴史的で文化的な多様な体験（着物、西陣織など）ができ、内容もとても有益だった」等の感想があった。

8月2日は、立命館大学にて、「教育格差が引き起こす問題点と解決策」について、地元の学生とディスカッションを行った。ディスカッション後は、同青年の案内のもと、京都の町を散策した。散策を通じて、京都の特性を感じるとともに、地元青年との交流を深めた。

浴衣を着て桂川を背に記念撮影する（嵐山）

住職の方と一緒に記念撮影する（大徳寺聚光院）

久保田教授からディスカッションの講評をいただく（立命館大学）

受 入 感 想 文

受入れを通して

京都府青年国際交流機構　受入実行委員長

京都プログラムの実行委員長として活動してきた期間はとても有意義だった。

私は昨年度、日本・韓国青年親善交流事業に参加した。このプログラムを通して日韓友好の手助けをしたいという気持ちが高まり、今回地元京都での受入れということで実行委員長をさせていただいた。去年自分が得たかけがえのない経験をいかに今年、韓国青年たちにしてもらうかということを真剣に悩んだ。そして、京都という魅力ある町で、どのように日韓友好の舞台にふさわしい活動ができるかということに焦点を当てた準備期間であった。京都という古き良き歴史ある町で、着物や談話といった体験を通して日本文化を感じていただき、また実際に感じるだけでなく触れていただくということを主なねらいとした。

今回のプログラムでは、ディスカッションの時間を多くとった。昨年、自分が参加した時は地方でのプログラムで交流が少ないように感じていた。その経験を踏まえ、京都では、ディスカッションプログラムをメインに交流にもフォーカスを当てた。地元の青年たちをあらかじめ募集し、ディスカッション、嵐山見学、自由視察などの日程に参加してもらった。地元青年の募集のために、FacebookなどのSNSを多く活用した。また、自分の通う大学の韓国語授業にて宣伝した。直接声かけをし、宣伝することが募集成功につながった。その場で質問に答えることもでき、よりたくさんの人に日韓交流に触れていただけたと感じている。

実際の受入れでは、25名の韓国人を率いてプログラムを進行したのだが、途中、文化差異による統率の難しさを感じるところがあった。しかし、それも新たな一面を知ることができたと捉えることができた。この実行委員長という役を終えたことは、これからの日韓交流の新たなスタート地点だと思っている。より知ることができたことを胸に、これからは日韓交流をするだけでなく、つくる現場にどんどん関わっていきたいという思いを強くしている。

受け入れた韓国青年と共に記念撮影する（歓迎会）

韓国青年を伏見稲荷大社に案内する（グループ別行動）

島根県プログラム（8月3日～6日）

8月3日、バスで島根県に入った一行は、島根県庁へ向かい、島根県副知事を表敬訪問した。副知事から、島根県の特性や魅力についてお話をいただいた。

翌4日午前中、出雲かんべの里を訪れた。ここは出雲地方の歴史や文化を学ぶことができる施設であり、館長から「民話から知る日韓交流」をテーマに講和をいただいた。島根県の神話を題材に、古くから続く日韓の関係について理解を深めた。

午後は、「地質や地形から見る島根県と韓国のつながり」をテーマに、松江市の御津海岸を視察した。地質学を専門にしている大学教授を講師に迎え、地形や地質から読み取れる韓国との関係性について学んだ。

18時半からは、ホストファミリーとの対面式を兼ねた歓迎会が開かれた。

歓迎会では島根県職員を始め、ホストファミリーや地元青年等、多くの関係者が参加をし、盛況であった。歓迎会終了後、韓国青年はそれぞれホームステイに向かった。

ホームステイは概ね好評で、韓国青年からは、「ホームステイを通じ日本という国を本当に感じることができた」「ホストファミリーが本当の家族のように接してくれて、本当に感謝している。お祭りや神社めぐりなどをしながら楽しむことができた」等の感想があった。

8月6日、ホームステイから帰着した一行は、地方プログラムの行程を無事終了し、帰京した。

海岸の地形について説明を聞く（御津海岸）

実行委員、ホストファミリーと一緒に歌を歌う（歓迎会）

島根県副知事と記念撮影する（表敬訪問）

受 入 感 想 文

島根と韓国のつながり

国際ネットワークしまね　受入実行委員長

今回の事業で私たちは韓国招へいの後半、ホームステイあり日程を担当した。内容としては、日本と韓国のつながりを意識し、島根と韓国双方に存在する同じような内容の神話に関する講話と、松江市で進められていた、ジオパーク構想に伴う日本と韓国の地層の類似性に関するフィールドワークを行った。

気を付けた点としては、国際交流であることを意識し、互い抱える問題を超越できる内容にしたことだ。比較的新しい文化や歴史には触れず、太古の昔、現在の日本と韓国があるところがどのようにでき、どのような話が存在するかを神話に詳しい有識者と島根県周辺の地形や地層の有識者を招いて話をしていただいた。中でも神話の話では先生から「様々な問題はあるが、互いを尊重し合い前を向くことが大切である」というお話をいただき、韓国青年の一人は終了時に「日本とのつながりを再確認でき、近くて遠い国といわれる日本だけど、やはり近い国であることが分かった」と言ってくれた。また、フィールドワークでは、数千年前には海底だった場所に、日本と韓国の青年たちと一緒に立っているというのに感慨深い思いを抱いた。

ホームステイでは、日程中ちょうど西日本最大の湖上花火大会が島根で開催されており、多くの青年がホストファミリーと食事や飲み物を楽しみながら壮大な花火を見ることができたのは幸運で、私個人としてもいい思い出になっている。

今回、実行委員長としてプログラムの運営に携わり、多くを学ぶことができた。反省として時期的に夏休み期間で学生の事前打ち合わせや当日参加の日程調整が難しかったことや、スタッフ側の事前の打ち合わせ不足によってやや行き届かない部分があり、プログラム運営においては事前の打ち合わせやスタッフのコミュニケーションが重要だと学んだ。良かった点は、講話における講師陣の人選がよく、参加青年からも「面白かった」の声を聞けたことだ。実行委員みんなで議論して、プログラムの本質を考え、組み立てたことが評価につながったと感じている。また、夏の時期ということもあり熱中症等々の心配もされたが、事前の対策と当日の注意の結果、参加者、スタッフとも体調を崩した者がいなかったのは最大の成果ではないかと考えている。

このプログラムの経験を通して得たものを来年度以降の受入れにいかすのはもちろん、会員各々の職場や地域コミュニティなど、いかせる場でいかしていこうと思った。

最後になりましたが、この事業においてお世話になった関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

館長から「民話から知る日韓交流」をテーマに講和をいただく（出雲かんべの里）

ジオパーク構想に伴う日本と韓国の地層の類似性に関するフィールドワークを行う（御津海岸）

ホストファミリー感想文

島根県ホストファミリー

この度、日本・韓国青年親善交流事業のホームステイをお引き受けしました。お引き受けしようと思ったきっかけは、息子が内閣府青年国際交流事業に参加し、島根県で国際交流のお手伝いをしており、昨年度は韓国にも派遣させていただきましたので、我が家でも何かお手伝いできることがないかと思い、希望させてもらいました。

歓迎パーティーで青年たちの顔合わせがあり、私たちの受け入れる青年は20歳の青年と副団長の男性でした。家族はなにぶん韓国語が話せませんので、日本語が堪能な青年が来てくれて助かりました。パーティーで青年たちはユニークでかわいらしい踊りなど、いろいろな出し物で楽しませてもらいました。

家庭では特別なおもてなしはできませんでしたが、我が家で取れた野菜を喜んで食べてくれ、一緒にお酒を飲んで、遅くまで話をしたのがとても良い思い出になりました。妻は韓国の歴史ドラマをよく観ていますので、青年たちとドラマの話をしたりしました。たまたま妻の母も訪ねて来ていましたので、海外の若者と話すことができてとても喜んでいました。

滞在中は息子の案内で、松江城や玉造温泉、出雲大社などを観光しました。特に玉造温泉の日帰り入浴が気に入ったようです。また、受入の期間中にちょうど宍道湖岸で花火大会があり、長男の家族も青年たちと一緒に花火を見ました。孫は恥ずかしがってあまり喋れなかったようですが、優しいお兄さんたちに遊んでもらって楽しい思い出ができたようです。

二泊三日の短い時間でしたが、海外の青年を家族として迎え入れ、賑やかで楽しい時間を過ごすことができました。ホームステイを通して、韓国青年の礼儀正しさ、年長者への心配りや優しさにとても感心し、メディアが報じる一面的なことだけで物事を判断してはいけないと強く認識しました。いつか韓国を訪れ、この新しい家族たちと再会できたらと思っています。

難しい問題を抱える両国ですが、こうして草の根の交流を通して、お互いの理解が進めばきっと良好な関係が築けるのではないかと思います。将来を担う若者たちが、この事業を通して議論や交流を深め、お互いの国や地域のリーダーとして活躍してくれることを願っています。

終わりになりましたが、この事業の益々の発展を心からお祈り申し上げます。

ホストファミリー、韓国青年全員で記念撮影する（歓迎会）

宍道湖岸で花火大会を楽しむ

受け入れた韓国青年と共に記念撮影する

東京プログラム（8月6日～9日）

8月7日午後、韓国青年は日本青年との都内視察を行った。日本青年の案内のもと、グループに分かれて都内を視察した。今年度の特色として各訪問先で地元の方にインタビューをし、日韓関係や韓国人観光客について率直な話を聞くことができた。

8月8日午前、評価会を行い、「本事業に参加して学んだこと」「今後この経験をどのようにいかしていきたいか」「プログラムの改善点等」の三点についてグループディスカッションを行った。韓国青年各々の事業の成果を振り返るとともに、今後の活動に向けての展望を話し合った。

11時45内閣府青年国際交流担当室長主催の歓送昼食会が開催された。歓送昼食会では、今回の招へい事業関係者が集まり、親しく懇談するとともに振り返りを行った。

午後の自由視察には、日本滞在中に出会った日本青年が多数駆けつけ、交流しながら視察をする機会となった。日韓両国の青年は日本語・韓国語・英語をおりまぜながらさらに交流を深めることができた。

翌9日、一行は、成田国際空港へ向かい、12時30分発OZ101便で帰国の途につき、15日間の日程を無事終了した。

浅草寺にて日本文化を学ぶ（都内視察）

二週間のプログラムを振り返る（評価会）

空港に見送りに来た日本青年と記念撮影する